



志度高だより 一飛翔の窓一

第96号
(H22.5.27.)

♪「いや～錆び付いちゃって」♪

「いや～錆び付いちゃって、まいったよ」運動公園のテニスコート近くを通りかかったとき、四、五人の中年男が交わす会話が聞こえた。颯爽とテニスのユニフォームに身を包んでいるのはいいが、中年男の特徴である出っ張った下腹部はどうにも隠しようがない。恐らくは、日頃の運動不足解消か、それとも健康診断で糖尿病の気があると言われ、あわてて運動を始めたかのどちらかだろう。「むかしはあれくらいの玉、楽々リターンできたんだがな」一番長身の男が言うと、「俺もボレーに行こうとしても足が動かない。気ばっかり前に行って」と小柄な小太り男が返した。

なるほど「錆び付いちゃって」というのはテニスの腕前のことか。彼らにしてみれば、むかし取った杓柄といきたかったのだろうが、いざコートに立ってプレイを始めてみると、思うように体が動かなかった。まあそんなところだろう。

私も思い当たる節がある。日本にいと英語を使うことはまずない。はっきり言って皆無だ。「英語ができていいですね」とよく言われるが、正直返答に窮する。というのも、英語が錆び付いて使いものにならないからである。寸暇を惜しんで勉強していた学生の頃は、まあそれなりに使えた、と思う。だが今はといえば、英語のことを聞かれるのが正直怖い。願わくば英語のことには触れないで欲しい。だって、真っ茶色に錆び付いて……。

思い出すのはリュックサックを背負って外国を放浪していたときのことだ。あの頃はいくら拙くても訪れる国の言葉を恥ずかしげもなく使っていた。聞いている人の耳には、もうそれこそ「こいつ何語しゃべってるんだ」と、耳慣れない雑音に内心笑っていたはずだ。それでもいっこうに気にならなかった。生き延びるために必要だったからだ。腹が減ったら食べ物をゲットしなければならない。そのためには言葉が必要だった。安宿を巡ってねぐらを探す。当然、言葉で交渉となる。言葉というのは遣っているうちに馴染んでくるもので、二週間もすればいっばしの使い手になっている自分に驚きもした。昔は自分で言うのもなんだが、結構できたんだよな～。なのに今は、いや～錆び付いちゃって～。

先日、久しぶりに柔道の練習に顔を出した。平均的な五十男より少しは鍛えているつもりだった。ところが練習が終わって、認めたくはなかったが、もう決して若くない、と悟った。体がパンパンに張って手足がヒクヒク痙攣しているのだ。それこそ、若いときにはこれくらいどうってことなかったのだ。だが、もっと驚いたのは二、三日してからだ。歳取ると、二、三日して筋肉痛になるの



よね。そう誰かが言っていた。その頃は、そんなもんかね、アホらしい、と高をくくっていたのだが、数日後、蒲団から抜け出ようとしたらバリバリと嫌な音。でも気にするほどのこともないか。気を取り直し跳ね起きようとしたら、今度はビーンと電流が全身を貫いた。もしかしてこれが例の筋肉痛？ 大袈裟だが、生まれて初めて筋肉痛なるものを経験した。毎日、走ってバーベルを挙げ、そして腕立て伏せに腹筋、十分鍛えているはずだ。ところがどうだ。体は糊づけしたみたいにバリバリで、蠅取り紙にくっついたコガネ虫だ。余りの無様さに笑いさえこみ上げてきた。普段使わない筋肉を使ったのが原因だった。みなさ～ん、忠告申し上げますが、何事も甘く見てはなりませんぞ。武技は熱湯の如し、と師範に教わったが、まったくそのとおりである。使わないとダメ！

さきほどの英語の話ではないが、結局は使わないと値打ちがない。世の中にはそんなものが多いのではないか。体然り、家然りだ。家なんぞはその典型だ。人が住まなくなると、一年もしないうちに廃屋になる。飛躍するが、文化だってそうだ。継承しなければ忘れられ、そして消える。多くのものが、使ってなんぼのものなのだ。

頭もそうだ。最近、頭の回転がおそいと思ったら、惰眠を貪るだけで使っていないことに思い当たった。このままだと痴呆症を早めるだけだ。確か、任天堂のDSとかいうのがあったな。頭を活性化するやつだ。とにかく脳に刺激を与え、柔軟性を取り戻すことが先決。まずは試しに数から。羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹……羊が百匹……おい、眠たくなってきたぞ。ダメだ。今日はもう寝る。続きは明日だ。みなさん、おやすみなさ～い。

